

(第2回考古天文学会議 (2020年2月15日~16日、南山大学))

星に名前をつけるということ・・・南西諸島、瀬戸内海、岩手県を事例として

北尾浩一

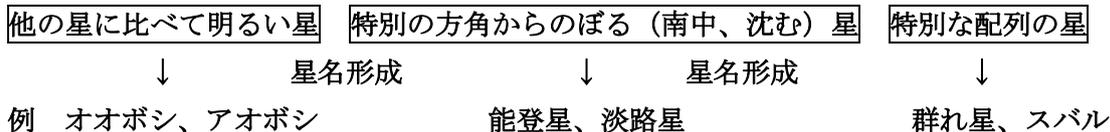
1. 星に名前がなくてもコミュニケーションは可能

右の絵は、源氏星、平家星を野尻先生に報告した香田まゆみさんが私に書いて送ってくださった絵である。星に名前をつけるということ・・・星に名前がなくてもコミュニケーションできたということ・・・あのお人達・・・と呼ぶことで充分であった。



2. 星の名前を人間のひとつの表現として捉える

星の形状や明るさ等の特徴を認知にもとづいて星名形成がなされた。

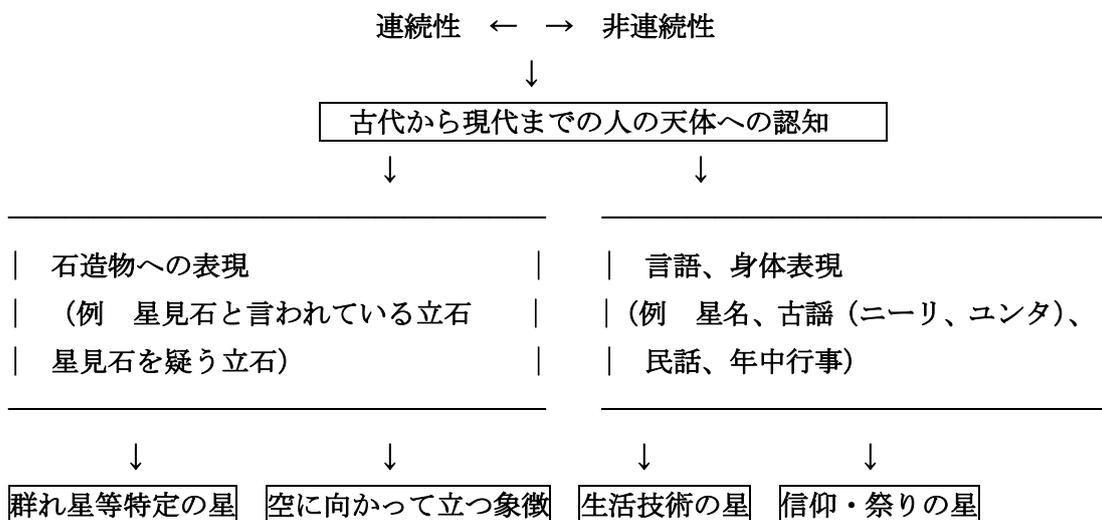


そして、「星に名前をつけるということ」をもとに人間の星の認知を論じるとともに、「星の名前 (以下、星名と記す) をひとつの表現として捉えたい。

即ち、下図のように天体の認知を表現したものとして、星名を捉える。また、星名だけでなく、古謡、年中行事を身体表現として捉える。

さらには、星見石を疑う立石 (城辺の神の杵、人頭税石 (ふばかりいし))、星見石と言われる立石を古代からの人の天体への認知の石造物への表現として捉える。

そして、古代から現代までの人の天体への認知を、現代まで連続したものとそうでないものに分けて考える。



したがって、単に星名形成、星見石を疑う立石と分けて論じるのではなく、人間の天体への表現として、それぞれのデータから天文民俗・天文考古および認知天文学的分析・考察を行なっていきたい。

### 3. 科研費による調査研究

天体認知により表現された星名、石造物、古謡等の伝承資料の調査を目的として、下記の調査を実施した。

(調査担当者は、ABC順)

- ① 2019年8月 東北・岩手県宮古市及び周辺部・・・北尾
- ② 2019年8月 沖縄県宮古島市・・・北尾、宮地
- ③ 2019年9月 瀬戸内海・山口県防府市野島、岡山県倉敷市・・・古屋、北尾
- ④ 2019年10月 沖縄県糸満市・・・北尾、宮地(協力 福里氏、友利氏)
- ⑤ 2019年10月 沖縄県西海岸、浜比嘉、伊江・・・北尾(協力 福里氏、友利氏)
- ⑥ 2019年11月 沖縄県宮古島市・・・北尾、宮地
- ⑦ 2019年12月 沖縄県石垣市、竹富町・・・北尾、宮地
- ⑧ 2020年1月 沖縄県与那国町・・・北尾、宮地

以下の理由で、瀬戸内海、東北、沖縄を調査地として選んだ。

#### ・東北地方

東北地方には、ムヅラ、サンコウ、マス、モッコ等、生活のなかでホシをつけずに使用する星名が広く使われている。そして、厳しい寒さ、荒れた海にかかわらず、星を目当てにしている。とくに、イカ釣りの役星伝承を通して、広く伝播している。その意味で、東北地方の調査研究にひとつのポイントを置きたい。

#### ・瀬戸内海地方

日本の星名伝承形成にあたって、瀬戸内海という夜間でも比較的安全に漁ができる環境に恵まれた地域があったことを忘れてはならない。瀬戸内海の星名伝承については、先行研究が唯一豊富な地域であり、さらには今日においても多様で豊かな星名伝承の記録が可能な地域である。それだけに、瀬戸内海は、星を認知し表現し文化を形成していく構造解明に必要な幅広いフィールド記録が存在するという意味で調査研究のポイントとなる。

#### ・南西諸島

日本の星の基層文化の研究にあたって、奄美大島、喜界島より南、即ち南西諸島の星名伝承は、吐噶喇列島以北と大きく異なっている。それらの相違点から、日本の星の認知構造について発展させていくポイントとなる。

#### 4. 天体認知の表現としての分析の方法にあたって留意すべき視座

天体認知を天体（星、月、太陽）だけで行なうのではなく、空（星空）を海、山、川等の自然環境と連続したものとして捉える。

### 海

連続↑ 境界線 水平線

### 空（星、月、太陽）

←星(天体)だけを見るのではなく、山、川、海等と合わせた景観として。

連続↓ 境界線 地平線

### 山、野、川等

この境界線（例 星の出、星の入り等）が生活技術としての星（天体）に重視される。

#### 5. 天体と他の自然環境の連続性—太陽と川を事例として

前項の具体的事例として、2019年10月に記録した宮古島保良で記録した俚謡をもとに考えたい。

俚謡も天体認知の表現であり、また、俚謡を通して社会で共有され世代を超えて伝えられた。宮古島保良で伝えられている歌は、空(太陽)と川との心意のなかの連続性を意味しており、星(天体)だけを見るのではなく、山、川、海等と合わせた景観として、捉えたことを示している。

「アガス° チダヤ ヤスムスガ  
ボラガー (保良川) ノミズ (水)

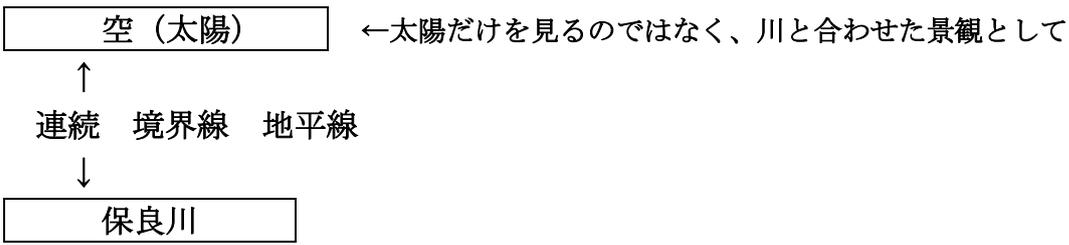
ダヨ ヤスムティノコトヤニャンヨ (休むことないねー)」

保良を事例とした天体と他の環境の連続性は次のようになる。

楽譜 宮古島保良 太陽の歌

採譜者 北尾正子

ア ガ ス チ ダ ヤ ヤ ス ム ス ガ  
ボ ラ ガ ー ノ ミ ズ ダ ヨ  
ヤ ス ム ティ ノ コ ト ヤ ニ ャ ン ヨ



6. プレアデス星団等の星名

(1) 東北・宮古

① プレアデス星団ではなくオリオン座三つ星 (小三つ星を含むケースもある) を六連星と呼ぶことについて

江戸時代の方言辞書『物類称呼』(越谷吾山著、1775年)には、「江戸にては〇むつら星といふ」とある。(右図) プレアデス星団を、六つの星が連なっている様子と認知して六連星(ムツラボシ、ムヅラボシ)という星名が形成されたのである。

プレアデス星団を六連星(ムヅラ、ムジ、ムジナ等に変化)と呼ぶケースは次のように広く分布する。

●ムヅラ、ムツラ

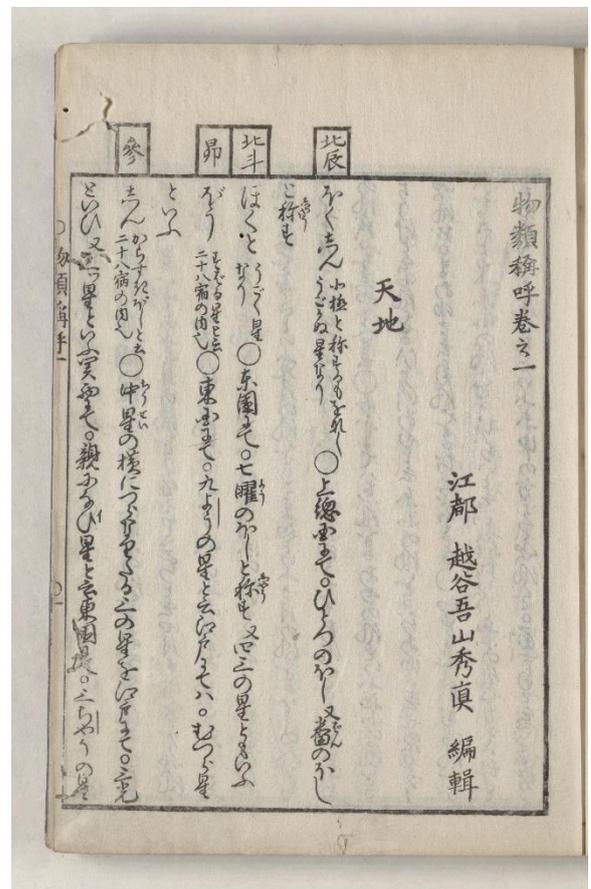
- ・青森県上北郡六か所村泊……ムヅラ
- ・岩手県久慈市……ムツラ、ムヅラ
- ・秋田県男鹿市戸賀……ムツラ
- ・秋田県男鹿市塩崎……ムヅラ
- ・秋田県男鹿市加茂……ムヅラボシ
- ・茨城県北茨城市大津町……ムヅラ
- ・群馬県利根郡みなかみ町藤原……ムツラ

●ムジラ

- ・青森県下北郡大間町大間……ムジラ
- ・青森県下北郡風間浦村易国間……ムジラ
- ・青森県下北郡風間浦村蛇浦……ムジラ

●ムジナ

- ・青森県下北郡風間浦村蛇浦……ムジナ
- ・青森県下北郡風間浦村易国間……ムジナ
- ・秋田県男鹿市塩崎……ムジナ
- ・秋田県男鹿市門前……ムジナボシ



ところが、宮城県気仙沼市、岩手県大船渡市において、オリオン座三つ星（あるいは小三つ星を含む）を意味していた。青森県八戸市においては、オリオン三つ星はサンコウとなる。

気仙沼よりさらに北の地域においても、オリオン座三つ星（小三つ星を含むケースもある）のムヅラ系の星名が伝えられているかどうか、調査の空白地域になっていた。

本調査によって、その空白地域においても、次のように六連星（ムジラ等に変化）がオリオン三つ星を意味していたことが明らかになった。

- ・岩手県下閉伊郡田野畑村…ムヅラ
- ・岩手県上閉伊郡大槌町赤浜…ムジラ

オリオン座三つ星がムジラであった大槌町赤浜においては、プレアデス星団について、「オクサ。ごじゃごじゃと星がかたまったのがあがってくる」と伝えられていた。

オクサは、岩手県下閉伊郡普代村においても記録できた。また、石橋正氏は、宮古市田老漁港、石浜漁港にてオプサを記録した。

また、宮城県本吉郡唐桑町津本（現 気仙沼市）で、モクサを記録した。「お草」ではなく、「モクサ」であった。

## ② 星名に「ホシ」をつけること、つけないこと

星をホシと呼ぶとは限らない。南西諸島においてはプス、プシ、プシが分布する。そもそも星名として、「ホシ」をつけないケースも広く分布する。たとえば、スバルボシと言わずにスバルと呼ぶ。

仕事をしているときの目標として、星の名前を呼ぶとき、できるだけ短いことが好都合である。魚の名前がアジ、サバ、ブリ、タイ、サケ等のように2文字が多く、長くてもマグロ、カレイ、サワラ、スズキ等のように3文字であり、速やかにコミュニケーションできるようになっているのと同様、星の場合も、「スバルボシが出た」と5文字で表現するより、「スバルが出た」と3文字で表現するほうが速やかで確実なコミュニケーションが可能である。

そもそも、人が言葉を生活に必要としたとき、それはできるだけ短いものであったのではないだろうか。星を認知し、それを言葉で表現したとき、短いほうが好都合であり、ホシをつけないのが本来であったという仮説を立ててみた。

しかし、後の時代になって、ホシをつけるようになった。最初につけたのは、ホシであろうかフシであろうか、プシであろうか。

東北地方においては、ホシあるいはボシであり、ボシの事例ははじめてである。一方、南西諸島においては、プシ、プス等記録ができる。

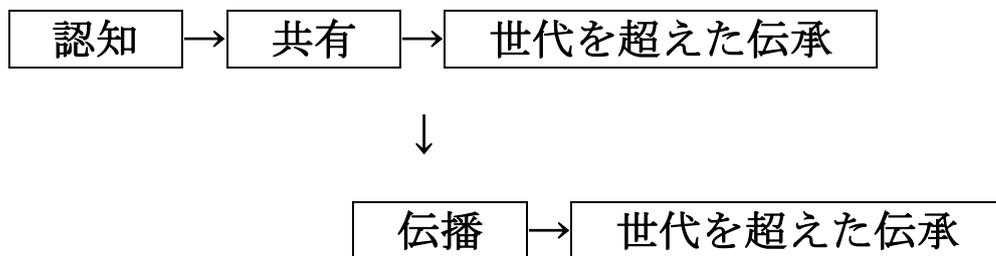
東北地方には、ムヅラ、サンコウ、マス、モッコ等、生活のなかでホシをつけずに使用する星名が広く使われている。そして、厳しい寒さ、荒れた海にかかわらず、星を目当てにしている。とくに、イカ釣りの役星伝承を通して、広く伝播している。その意味で、東北地方の調査研究にひとつのポイントを置きたい。

## (2) 瀬戸内海

プレアデス星団については、スマルが広く分布する。オリオン三つ星については、カセボシを記録することができる。

本調査において記録した俚謡、ゴンタロウボシ（アルクトゥルス）等の注目すべき星名については現在分析中である。

星の形状、明るさ等を認知する。ただ、認知するだけではいけない。また、その段階にとどまれば文化形成までなされたとは言えない。次のように、地域で共有され、場合によっては、地域を越えて空間的に伝播し、さらに世代を超えて伝承されるというプロセスを経て、時間的、空間的なひろがりのある文化として形成されたのではなかろうか。



そのプロセスの進行にあたって、俚謡というものは、「共有」「伝播」「世代を超えた伝承」の力となる。

北尾が2012年に福武財団の研究助成を受けて実施した野島において、次のような従来記録した俚謡とは異なったものを記録したが、その異なるという多様性こそ、ひとりひとりの言葉で歌った証拠であり、単に受動的に記憶するにとどまらない「共有」「伝播」「世代を超えた伝承」を可能としている。

楽譜 野島の星の歌  
採譜者 北尾正子

あー スマール まんぞく  
ほやよほほつ  
そんのひろいの  
スマル ポシゴジゴジ  
うめのひろいの

エビのこしやかごんた  
いえのひろいの  
トトカカカゴジゴジ

ともすると、次のような誤解をされることがある。

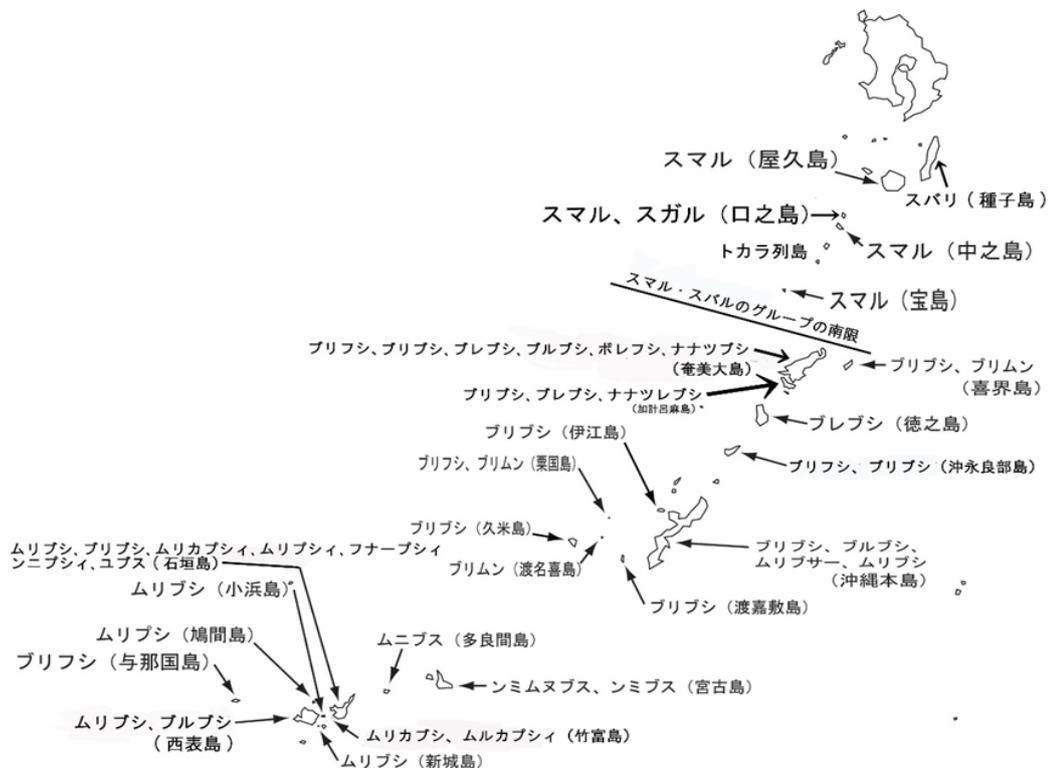
- 方角を知るために使用する星は北極星（こぐま座 $\alpha$ 星）である。
- 瀬戸内海は、島がすぐ近くに見えるので、方角を知るために星を目標にする必要はない。  
しかし、本調査では、次のような伝承資料を記録することができた。
- 濃霧のために星は見えても下のほうの島が見えないことがあり、そのときは星が目標となった。
- 北極星だけを目標にするのではなく、ヨアケボシ（明けの明星）が東に見えることからヨアケボシを東と頭に入れて方角を決めたこともあった。

### （3）沖縄（南西諸島）

#### ① プレアデス星団

奄美大島・喜界島より南の地域においては、群れ星のグループの星名が分布している。現在、データ数を増やすために調査を実施しており、4月以降も可能な限りフィールド調査を実施して、結論を出していきたい。今回は、その中間報告として位置付けたい。

2018年の拙著『日本の星名事典』における到達点をさらに精度の高いものとしていきたい。



全体として、東北、瀬戸内海に比べて特筆すべきことは、ブシ、プスというように星が入っており、ムリとかブリだけでの呼び方がなされていないことである。

与那国島においては、星をフチ、フシと呼んでいるケースを記録できたが、群れ星については、ブリブシのケースが多く、ドゥアギルフチ(ドゥ(夜)アギル(あける)フチ(星))、シカマブチ等と異なり、与那国固有の星名かどうかは今後の課題となった。

また、群れ星のグループの星名がプレアデス星団を意味することは確実であるかどうか、次のような点に留意した。

- ・群れ星がプレアデス星団を意味するケース
- ・プレアデス星団を意味するとは限らないケース(プレアデス星団を意味するケースもある)
- ・プレアデス星団を意味するとは限らないケース(プレアデス星団を意味するケースを認識していない)

本調査において、プレアデス星団と特定できない次のような事例を記録した。

#### ●本部町渡久地港の事例

次のように、聞き取り調査をした話者 2 名とも特定のプレアデス星団を意味していなかった。

「ブリブシ、まとまって天の川みたいなまとまった」

「かたまっている。ブリブシ。いまでも天気の良いとき見える」

#### ●大宜見村根路銘の事例

次のように、聞き取り調査をした話者 3 名とも「星がむらがっている」「群れている」と認知しており、特定のプレアデス星団を意味していなかった。

「ムルブシ、たくさんある星をムルブシ、いっぱい」

「ムルブシ、天の川をいうのでは… 星がたくさんむらがっている。天の川のこと、そのことをムルブシ」

「たくさんいっぱい小さい星が群れてムルブシ、ムリブシどちらもいう」

#### ●国頭村辺土名漁港

次のように、天の川かどうかははっきりとしなかったが、少なくともプレアデス星団特定の星を意味するのではなかった。

「ブリブシ、天の川だろう。星がいっぱい群れてる」

#### ●宮古島市久松地区

ムリブス(群れてるかたまり)(ひとつかいくつもあるのかははっきりとしない。特定の星

とは認識していない)) である。

●宮古島市来間島 (くりまじま)

ンミブシ (ンミ:群れ、星がいっぱいつまっている→ンミブシ) (いっぱいある) (北尾注:したがって、プレアデスのみではなく、プレアデスもまた、他のいっぱいあるのもみなンミブシ)

② ウヤキブスとウシウマサダチ

星名は、ひとつの人間の認知の表現である。認知の表現として、宮古で特徴ある星名についてウヤキブス、ウシウマサダチを事例に考える。

●事例1 ウヤキブス

1980年代に南西諸島のアンケート調査で、南十字の星名として、ウヤキブス(沖縄県平良市字松原(現・宮古島市))を記録した。ウヤキは「金持ち」、ブスは「星」で、金持ちの星という意味である。しかし、それだけの伝承資料では確定できず、本調査で確定をめざしていた。

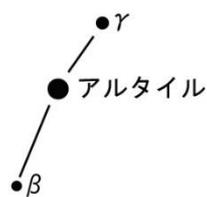
11月の調査で、宮古島市松原において、「おやじがウヤキブスに夜明け手をあわしていた。ウヤキブスといって夜明けに手をあわして。おやじなんかやっていた。ウマノファブスとウヤキブスはいっしょ」と記録した。朝早くひとつ光っている星がウヤキブスであり、ウヤキブスは南十字を意味しなかった。ただ、ウマノファとウヤキブスが同じという点はアンケート調査と共通していた。

一方、石垣島のチンダラ節における「織女と牽牛」という伝承事例を加えて、「南十字」「織女と牽牛」「明けの明星」の3つの候補が出た。ひとつの星名を複数の星を意味するケースはある。(例 一般的にプレアデス星団を意味するムヅラ(六連星)が、宮城、岩手のムヅラがオリオン三つ星(小三つ星)を意味する等) ウヤキブスも、「南十字」「織女と牽牛」「明けの明星」の3つとも意味するのであろうか。

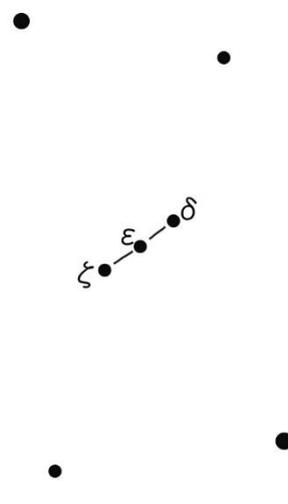
### ●事例2 ウシウマサダチ

1980年代に実施したアンケート調査においては、アルタイルと $\beta$ の星名として、ウスウマサダティブス(牛馬サダティ星)を記録した。牛と馬を連れて(サダティ)いる星で、サダティとは「連れる」という意味。沖縄県平良市(現 宮古島市)に伝えられていた。

ところが、11月に記録したウシウマサダチは、いちばん上が牛、真ん中が人間、下が馬を連れて秋にのぼる三つの星であった。同じ宮古島でオリオン座三つ星とわし座アルタイルと $\beta$ の見方を記録することになった。



平良↑



保良↑

### ③ 天体認知の表現としての星見石

星見石を、次のように分類して考察を進めたい。即ち、石垣島の星見石をほんとうに星見石としていつどのような形で機能していたか検証をするために星見石として機能していたと断定せずに、「星見石と言われる立石」として考察を進める。また、宮古島の星見石と石造物への表現を「星見石を疑う立石」として考察を進める。

#### i) 星見石と言われている立石

石垣島、竹富島等、八重山に設置されている星見石を、「星見石と言われている立石」と呼ぶことにする。(写真右 石垣島旧石垣村)(写真左 竹富島)

石垣島については、喜舎場永珣氏、竹富



島については、上勢頭亨氏等をはじめとする先行研究があり、星見石として捉えられている。しかし、本当に星見石として機能していたのかどうかは議論しなければならない点が残っている。空に向かって立つ「立石」について、人間が空に向かって表現した石造物として捉え、それを最初から群れ星を認知して星見石として設置されたのかどうか、考察を進めていきたい。

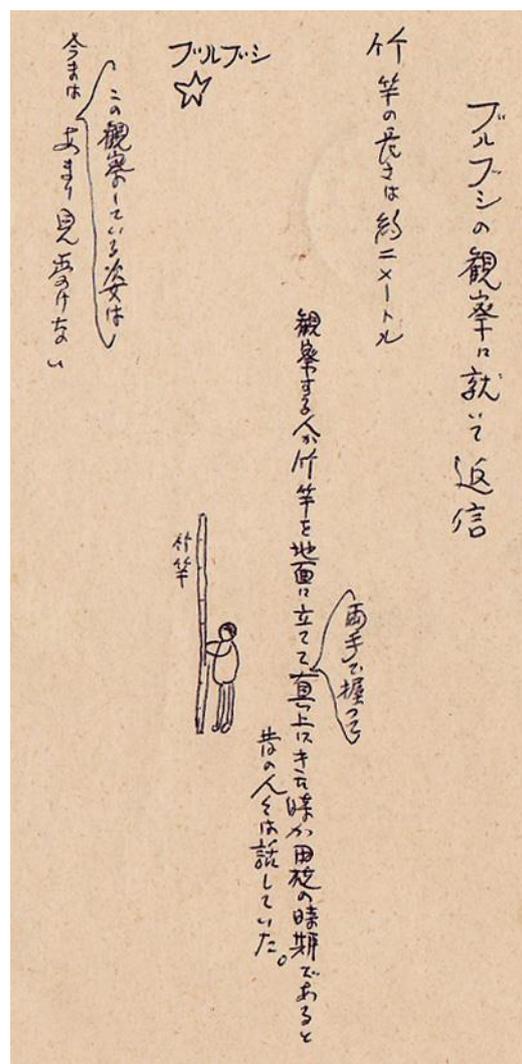
そもそも、日本全体での星で季節を知ることが目的とした伝承で石造物を用いる例は八重山以外にない。いわゆる地平線、水平線に現れるとき、まんどき（南中）で目標として機能するからである。西表の事例においても、右図のように竹竿によって観測されていた。

## ii) 星見石を疑う立石

宮古島において、荷川取の人頭税石、城辺の神の杵という八重山の「星見石と言われている立石」に似ている立石が設置されている。それらが星見石という機能を果たしていた可能性については1979年、八重山の星見石と言われる立石に出会って以来のテーマであった。しかし、そのテーマについて黒島為一氏の研究があ

ったものの星見石という断定はなされなかった。そもそも星見石についてはプレアデス星団との関連だけで論じては本質を見失う危険性がある。目的は、星見石という可能性を論じることではない。立石を空に向かって設置されているシンボルとして捉え、それが後に神の杵、人頭税石として語られたという可能性も排除せずに考察を進めたい。

1979年、石垣島の星見石（前項の写真）を見た。一方で、極めて似て空に向かって立つ人頭税石と似ていること、それらが星見石であるかあるいは違うものを意味したのか原点から考察していく必要を感じた。「星見石を疑う立石」が星見石と機能したかどうかは後の測定の考察によって明らかにしていくとして、星見石であってほしい気持ちを抑えて言えば、「星見石を疑う立石」さらには「星見石と言われている立石」も、後の時代に、神の杵や人頭税や星見石が加わっただけで、もとは全然違うものだった、何かのシンボル、コス



モロジューというか世界観、自然観、ことばを変えれば、宇宙に対する情念、包括的な認知の表現までさかのぼらねばならないのでは・・・という可能性を感じる。

(写真 宮古島の神の杵(道路側、ユタの進言により移動していない)



## 7. 今後の研究への発展と課題

### ① 調査データの積み重ね

天体への認知の構造を明らかにしていくために、星名伝承のデータの数を増やしていくことがまず必要である。そして、古代から現在まで認知の連続性と非連続性を具体的に明らかにしていくにあたって、時間軸での認知、空間軸での認知、地平線、星空と海との境界、星、山、海等と連続した自然環境の認識として捉えていくことを今後の課題としたい。

### ② 多良間島のニ一り等の調査研究

広く歌われたが今は多良間島に粟摺り歌として残っているだけであるニ一り等、研究課題がある。

星の歌、伝承から空間認識、時間認識を読み取り、さらには、ことばで表現されること以外での表現(石造物など)をひとつの表現として捉え、研究を進めていきたい。

### ③ 古代から現代にわたるまでの天体の認識、星名伝承形成を明らかにするにあたって南西諸島の位置づけ

日本の星の基層文化の研究にあたって、奄美大島、喜界島より南、即ち南西諸島の星名伝承は、吐噶喇列島以北と大きく異なっている。それらの相違点は、日本の星の認知構造について発展させていくポイントとなる。特に、先行研究、星名記録のデータ数が絶対的に不足しており、現地調査に比重をおきたい。

また、次の点に留意したい。

・南西諸島を宮古、石垣、与那国で切れたものとしてではなく、連続したものとして捉える。台湾の離島、ポリネシアを含めて、星名形成、星空の認知について、データ数を増やし、日本の星の基層文化の構造を明らかにしていく。

南西諸島の星名伝承の研究、しいては星を認知し、文化形成に至る構造の解明にあたって、未調査地域、データがアンケート調査でしか記録していない地域がなお多数存在し、調査を重点的に進める必要がある。既に調査を実施したところも、再調査、追調査を続け、データを蓄積していく。

#### ④ もうひとつの時間認識へのチャレンジ

季節を知る、時刻を知るという時間認識に加えて、人生の終わるときを知るという時間認識がある。これらについて、調査研究を継続したい。

##### 事例1 与那国島のティンダバナ

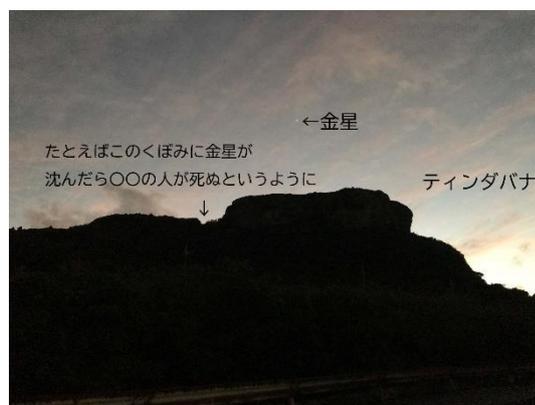
・ティンダバナに星が出たら、この星出たら人が亡くなる、と聞いたことある。ふつうの星より大きく見えた。明るく見えた。あの星でたら、あーこの星出たら、2, 3日で亡くなる。

・ティンダバナのくぼみによって（男の人が死ぬとか女の人が死ぬとか）判断した。

・ティンダバナの上に星がすごいきれい

にはっきりみえてイチバンボシ。ちかいうちに尊い人、偉い人が亡くなる。叔母(?) (産婆さん) が亡くなったとき、大正生まれのいとこが30年くらい前、星が見えていたね、近いうちに尊い人、それ相応の人(えらい人)がなくなると思っていた。それ相応の人がなくなると思っていた・・・と(お悔やみの言葉に)。

・星がくぼみ(いま木が生えているけれどもはっきりとしたV字だった)にはいる星が弱々しいと老人が亡くなる。星がくぼみにはいる星が明るい若い人が亡くなる。星の名前はわからない。靈感の強い人は、上の岩(北尾注 前日のぼって座った山)に麦わら帽子をかぶった人が釣りをするのを見ることができる。(昔、海?)



##### 事例2 松原みゃーか

写真右 ←が冬至の日の出方向。

(宮古島の俚謡、松原みゃーかの撮影、測定、沖縄本島の調査においては、友利健氏の協力を得ました)

